

駐日アメリカ大使 ジョン・ルース様  
在沖米国防領事 アルフレッド・マグルビー様  
内閣総理大臣 野田 佳彦様  
防衛大臣 森本 敏様

## 繰り返される米兵の性暴力に抗議し新たな選び取りを提案する声明

10月16日、沖縄県本島中部にて米海軍の上等水兵、同三等兵曹2名が、女性に性暴力を加え、ケガをさせた疑いで沖縄県警に逮捕されました。女性は、全治1週間の頭部打撲も負ったと報道されており、残虐さと複数による加害が被害者に、どれだけの恐怖と苦痛を与えたかは想像を絶します。

私たちは、何度繰り返されても無くならない米兵による性暴力に対して、強く抗議の意を表明致します。在沖海兵隊基地では2010年10月以降の1年間に性暴力事件が67件と米海軍省と海兵隊本部の報告書で判明、しかも米国防省の調査では性暴力の8割が申告されていないとの指摘があり、被害の全貌は闇の中と言えます。

これら一連の事件は、1995年に起きた米兵による小学女兒への性暴力事件の際、当時の駐日米大使館のケビン・メア安全保障課長の発言「軍隊ではなく、個人の問題だ」は、あてはまらない事だと言えます。事件は単なる個人の問題では無く、軍隊そのものが「人の人権も尊厳も認めない」教育を行っているのであって、米軍という軍隊が持つ構造そのものが、終わらない事件を沖縄にあって再生し続けているのです。

また、被害者達の生涯にわたる苦痛に対し、加害者の罰則は軽いものであり、そのこと自体とうてい納得出来るものではありません。米軍は何十年経っても、沖縄の人たちにとって「良き隣人」とはなり得ていない事実を認めるべきです。この度の事件は、被害者のみならず、沖縄の人々の心を深く傷つけました。

私たちは、沖縄から新たな決意の声が上がっていることを耳にしています。「沖縄にとって安全保障となり得ない基地軍隊は要りません。日米安保を必要とするならば、日本本土でお引き取りください。島ぐるみのオスプレイ配備反対は、米軍基地撤去の運動へと繋げていきます。」70年にもわたり沖縄の人々が耐え続けてきたという事実に基づき、いわば当然の発言です。この想いに米軍、日本政府、そして私たち自身も向き合い現在の困難な状況を自らの課題として捉えていく必要に迫られています。

これ以上、沖縄の人々に苦痛と恐怖を背負わせる事無く、基地の問題に対して真剣に考え、最善の策を選び取らなければなりません。性暴力事件を再び繰り返さない為には、「沖縄を尊重する」ことが必要です。日本が保持する平和憲法は、沖縄では一度も遵守されていません。日米安保という名のもとで、日本本土の安寧の背後で、沖縄をないがしろにし戦闘の場で日常生活を強いてきたのです。沖縄に目を向け、現実を知る努力が必要です。安心して歩ける街、学校を含む生活の場が真に穏やかなものとなるように、一方的に押しつけている米軍基地やオスプレイ配備という「暴力」を取り除き、沖縄が平和の地となるように、命の外交と政治が行われることを強く願います。

2012.10.20

日本バプテスト連盟 性差別問題特別委員会